

夫婦から養子に 形を変えても家族

結婚10年、性別への違和感を抱いた父親のカミングアウト

身体的な性別に違和感を持ち、生きづらさを感じている人がいる。自身の「性別自認」に気づくタイミングは人それぞれ。なかには結婚後に気づく場合もある。京都市の今西千尋さん(37)は、男性として生まれ、現在は女性として暮らしているトランスジェンダーだ。カミングアウトし

たのは、結婚して10年目。なぜ年月がかかったのかという、子どもの頃から抱いていた「違和感」を、はっきりと言葉にできたのが、結婚後だったからだ。覚えていたのは、5歳の記憶。実家の離れにある押し入れに入った。姉の洋服をこっそり持ち

込んで着替えた。姉の洋服を着てみたいと思っていたからだ。小学生のときは、留守番中に女性用の下着をつけてみたことがあった。小さな母のサンダルを履いてみたことも。「そのとき、心の中を整理できていませんでした。いま思えば、女性の服を着ると、安心する自



結婚後に性別違和を感じた今西千尋さん(左)は、博子さん(右)と離婚後に養子縁組。形を変えても家族として支え合っている

生き方

た性別と自分のアイデンティティは違うのではないかと気づく。ただ、子どもの頃は違和感が強くなくてやり過ごす人も。それが、大人になって夫や妻となり、性別による役割を考えさせられることが、気づききっかけになることもあるという。「その人が気づいたタイミングが、結婚後だったということがあると思います」(中塚教授)

また、男性として生まれた人は、性別自認が違ったとしても、気づいた行動に移したりするのがある。年齢を重ねてからというケースが多いのではないかと、という指摘もある。「(2019年)日本性同 性障害と共に生きる人々の会」の永沼利一代表は言う。「一期待される社会的役割を果たすために、意識的にか無意識的

にか、性別違和に気づかないよううに情報をシャットダウンする人もいます。また、性別違和に気づいていなくても、空気を察して自分を抑圧するため、行動を起こさないこともあります。自らの性別違和について、結婚後に配偶者や子どもに打ち明けるのは、友達に打ち明けるのとは深刻さが違うようだ。セクシュアリティ研究の石田佳さん(成蹊大学非常勤講師)は言う。「家族へのカミングアウトによつて、家族の関係性が一時的に悪化し、修復に時間がかかる場合がある」

千尋さんもカミングアウトの際、覚悟したという。「離婚を求められるのではないかと、先のことを考えるのが怖かった」

「家族へのカミングアウトによつて、家族の関係性が一時的に悪化し、修復に時間がかかる場合がある」

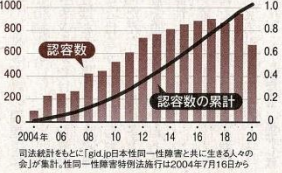
実際に、博子さんはすぐにには受け入れられなかった。千尋さんにむしろ「男性らしさ」を感じていたからだ。昔から、神輿を担いだり、ポートを漕いだりする姿が印象に残っている。「男性としての千尋さんを好きになりました。願わくは、男性のままでいてほしい」と思いました(博子さん)

ただ、千尋さんもカミングアウトをきっかけに、これまで抑え込んでいた気持ちをコントロールできなくなった。髪の色を少しづつ変え始めた。髪の手を伸ばして、化粧をした。そうした姿を見た博子さんは、上の血圧が180まで上がった。よくなって、体調を崩した。こ

分がいました。女性の格好をしたい気持ちは大人になっても続いた。東京に出張があると、新宿2丁目のスタジオで女装して写真撮影をした。それがストレス発散だった。ドラマがきっかけで

千尋さんは男性として生きなければならぬプレッシャーを抱えて生きていた。実家は鉄工所で、長男。家業を継いで、後継ぎを作ることが期待されていた。そんなとき、妻の博子さん(56)と出会った。前向きな博子さんにひかれて、1995年に29歳で結婚。2人の子どもにも恵まれた。ただ、女装できる店にこっそり通うのは変わらなかつた。

戸籍上の性別を変更した人は累計で1万人を超えた



それまでは性別違和という概念さえ知らず、自分が何者かわからなかつたのだ。家族へのカミングアウトに至つたのはドラマから3年後、38歳のときだった。カバンに入れていた女性用の下着を、博子さんに見つかつてしまふ。浮気を疑われ、「それは私のものです」と重い顔をして答えるしかあつた。

空気読んで自分を抑圧

な。結婚後に気づくことがあるのか。GID(性別同一性障害)学会理事長で、岡山大学大学院の中塚幹也教授は「出生時に割り当てられた性別への違和感を覚えるタイミングは人それぞれです」と言う。

長女に着付けを頼まれ

「単に好きだからでなく絆があるから、私たちは支え合っています。新しい家族の形を築けたんじゃないでしょうか」